

ポラリスを仰ぐ北の大地から

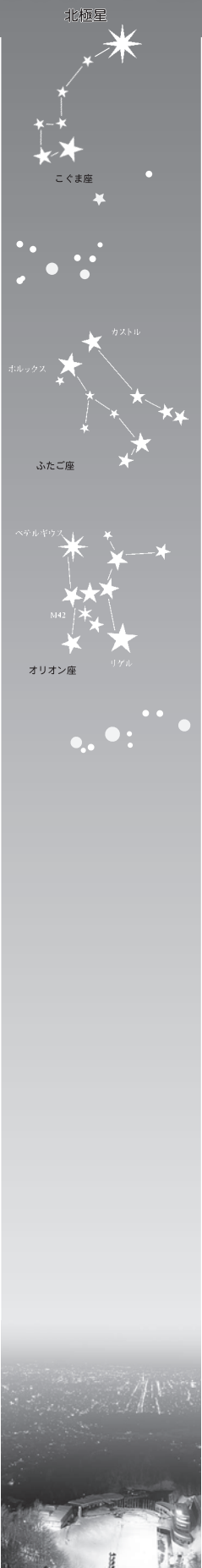
幻覚

空知医師会 会長 かみぐちけんじろう
 上口権二郎

小学2年生の冬に、ぼくは風邪をひいた。39度台の発熱があり、寝込んでいた。夜中に悪寒で目が覚め、ぼんやりとした頭で、天井の照明のほぼ中心にある弱く光る豆電球の明かりを何気なく眺めていた。ゆっくりと電気あんかをたぐり寄せ、お腹の近くに持ってきた。いくぶん寒さが軽くなった気がした。少し寝た。顔はほてっていたが、寒さは感じなくなっていた。熱が出るとよく吐くので、青い小さなバケツがすぐ近くに置いてあったのが見えた。

ふと天井の端をみると、10センチ程度の円盤状のものが弱く光りながら天井の辺縁に平行にゆっくりと動いているのが見えた。ぼくは、なんか変なものが動いているなど思ったが、高熱のためか、さほど違和感を感じなかった。また、寝てしまった。再び目が覚めると円盤は大きく移動していた。数が2個になっていた。円盤が通った軌跡には、天井と同じ薄茶色の何かが作られており、その部分だけが天井よりも高さが低くなっていった。ぼくはとてむだるく、朦朧としていた。徐々に天井が何かによって埋められてきている。天井の高さから数十センチくらいまで埋められ、ゆっくりだが徐々に下に迫ってきている。「おかあさん、部屋が埋まっちゃうよ、助けてよー」と隣の部屋で寝ている両親に助けを求めたくなったが、だるさで声は出なかった。そのまま寝てしまい、次に目が覚めると朝だった。当然天井はいつものままの姿だった。バケツはあったし、豆電球は点いていた。

今考えると、私はインフルに感染していたのだろう、と思う。服用していないが、インフル薬の添付文書に記載されている小児男性の異常行動とはこのような幻覚で引き起こされるのか。今年の冬は2年ぶりにインフルが大流行しそうです。会員の皆さま、どうぞご自愛ください。



「北海道家庭学校」謹製 発酵バター&チーズ

遠軽医師会 会長 たなかみのる
 田中 実

「北海道家庭学校」は1914年に留岡幸助氏によって創設された男子児童自立支援施設で、少年の教育こそが罪人を減らす本当の道という理念のもと、生活するのに必要な作業を児童と職員、家族が共に取り組む日常活動が教育の中心になっています。施設内には学校の歴史を物語る礼拝堂があり町の観光スポットにもなっていますが、私が小学生の頃、学校を抜け出した児童に、買ってもらったばかりの自転車を窃盗されて以来、同学校にはあまり良い印象を持っていませんでした。

遠軽に戻り児童を診察する機会も増え、学校後援会の一員として応援する立場になってから毎年毎に自家製バターが届きます。児童と職員が育てた放牧牛の牛乳で作られたバターは、素朴なパッケージそのものの味とともに児童にも親しみを持つようになりました。2019年に「バター・チーズ工房」が完成し、バターに加え、職員が試作を続けていたチーズも販売するための製造に取り組み始めました。さけるチーズ「家庭学校の薪」、ウォッシュタイプの「トメオカ」、ラクレットチーズ「サナプチ」がありますが、初めて出品した国産ナチュラルチーズの全国品評会『ジャパンチーズアワード2022』で、「家庭学校の薪」と「トメオカ」の2品が金賞と銅賞に輝きました。

お勧めは「家庭学校の薪」で、試作品は見た目も味もチーズというより牛乳団子で販売は厳しいと感じていましたが、昨年毎に届けられた受賞製品はまるで別物のように進化しており、ミルク感たっぷりの素朴な味は子供やチーズが苦手な方でも楽しめそうです。ホルスタイン牛とジャージー牛合わせても二十数頭で搾乳量も限られ収支は厳しいようで、微力ながら今後も応援していきたいと思っています。製品は同校ホームページから、また道の駅「遠軽森のオホーツク」で購入できます。数量に限りがあり、安価とは言えませんがお試しくださいとありがたいです。